継続的に学び続けるための学習目標の設定を支援する授業の設計

A Study on Designing Learning Objectives for Sustainable Learning.

○　望月　紫帆　　西之園　晴夫　　堀出　雅人
Shiho MOCHIZUKI　Haruo NISHINOSONO　Masato HORIDE
特定非営利活動法人学習開発研究所
NPO Institute for Learning Development

要約　筆者らは悉皆研修や必須科目の授業における、主体的な学習のための学習目標の在り方を追求している。学習が研修や授業内の一過性のものに終始するのではなく、終了後も継続的に学び続けるために、学習開始時だけでなく終了時にも学習目標の設定が重要であると考え実施した結果、学習者が新たに習得したい技能やその習得方法を説明する際に、学習経験を根拠としながら学習内容を意味づけていることや、授業の形式や方法がこれを強化する可能性が高いことがわかった。

キーワード　学習目標，主体的な学習，学習の意味，継続的な学習

＜問題提起と研究目的＞

能力や関心が多様な学習が、悉皆研修や必須科目の授業で主体的に学ぶためには、自ら目標を持ち、達成に至るまでのプロセスを描き、さらに達成状況やつぎの課題を見出すことが望ましい。

筆者らは、学習目標が学習する意味と指導者が期待する成果によって構成されているという仮説をたて、学習者が自身の学習を意味づけた説明をレポートから抽出した結果、指導者が示した成果の内容とは記述の仕方が異なるが、両者には対応関係があることを報告している（望月ほか, 2010）。

さらに授業を終えた後も学習を継続させていくためには、その後の学習を見通せるような目標を設定できることが望ましいと考える。

そこで本研究では、持続可能な学習目標の立て方を模索するために、今後の計画となる学習目標が実際にどのように設定されたのか、それは何によるものなのかを調べた。

＜対象と研究方法＞

佛教大学教職必須科目「総合演習（情報教育）」は、3 回生以上を対象として開講された授業である。オムニバス形式という短い期間で多くのことを学ばなければならないことから、授業後の継続的な学習が望ましい。この授業で①最初に学びたいことの設定（最初の学習目標）、②毎回授業後に学習の意味を小レポートで考察、③学んだことや今後学びたいことを記述する（今後の学習目標）の３つを取り入れ、実践した。

クラス	人数	開催時期（5 回ずつオムニバス形式）
1	60	2010 年 4 月 14 日～5 月 19 日
2	59	2010 年 5 月 26 日～6 月 23 日
3	60	2010 年 6 月 30 日～7 月 28 日
※　今回の調査に有効なﾚﾎﾟｰﾄ数は約 170 名分		

■講義テーマ：「あなたらしく学び続けるための情報活用能力を習得する」

回	テーマ	内容
1	アイスブレイクしよう	情報活用能力の定義
	方法：ワールド・カフェ、グループ学習 200 字ﾚﾎﾟｰﾄ：文部科学省の定義，あなたにとっての情報活用能力とは	
2	アンテナをたてよう	発想法の違い
	方法：ジグソー学習，発想法 200 字ﾚﾎﾟｰﾄ：関心をはっきりさせる意義，あなたはどの方法を活用したいか・その理由は	
3	アイデアを活用しよう	情報管理，情報収集，情報モラル
	方法：ジグソー学習 200 字ﾚﾎﾟｰﾄ：他人のアイデアと自分のアイデアをいつでも活かせるようにするためには，配慮することは	
4	ネットワークを活用しよう	交渉
	方法：グループ学習，概念図 200 字ﾚﾎﾟｰﾄ：情報を活用する上でネットワークを築くことの意義とは，どのようなネットワークを理想とし、どのような手順で築いていこうと考えるか	
5	次の一歩を考えよう	次の課題
	方法：ワールド・カフェ 200 字ﾚﾎﾟｰﾄ：今後満足できる学びのためにどのように情報活用能力を活かし、さらにどのように高めていきたいか	

■レポートレベルのルーブリック（目標選択制）

目標は、最優秀（説得力），優（実践力），良（持論），可（単位）の 4 段階から選ぶことができる。毎回の小レポートを合体させて最後に提出する。

到達基準	可	良	優	最
参考文献（個人的・企業 Web や新聞不可）1 冊以上を用いてレポート内の自分の主張の裏付けができる。				●
今後の展開について予測し、本講義期間中の学びをどのように活かすかオリジナルアクションプランを一部示すことができる。			●	●
本講義期間中（5 回の授業や HW 等の自主的な学習）の自分の経験に基づいた説明もできる。		●	●	●
情報活用能力を習得することの意義を、文献や公的な資料に基づいて説明することができる。	●	●	●	●

＜結果＞

最終レポートに記されている最初の目標、授業で手に入れたことと、今後の目標のそれぞれがどのように記述されているかを調べたところ、以下の３点が明らかになった。

a)　今後の目標では学ぶ理由が示されている

最初の目標は、何を手に入れたいのか単語レベルで簡潔に示されている例が多く、それを手に入れる事の意味づけははっきりしていない状態であった。授業が終わり、学んだことを踏まえて今後どのように学んでいきたいかを目標設定したところ、「したがって，そのために，だから，」などの学ぶ理由を示す接続詞が使用されている傾向が高くなった。最初の状態と比べると、学習を通して学ぶ意味づけがなされてきたと解釈できる。

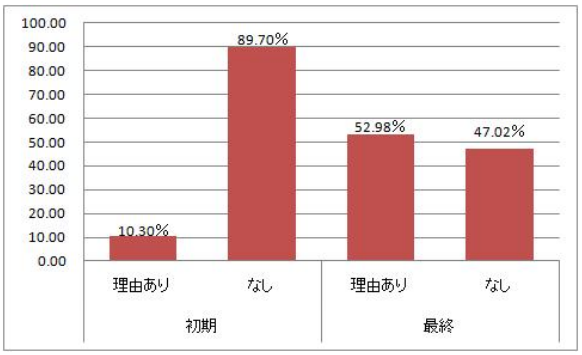

図１　学ぶ理由を説明している割合の変化

b)　学習形態や方法による意味付けへの影響

今後の課題の内容が、人の為に学ぶ、あるいは人と学ぶことに意味付ける傾向が高くなっている。最初は自分の為に学ぶという、個人的なレベルの意味づけにとどまっていた状態から、協調的な枠組みで学ぶことにより学習内容を社会的なつながりをもつものとしての認識に移行したのではないかと考えられる。また、a)の結果のように学ぶ理由が示されたことも、毎回習得した技能の意味を問う小レポートを重ねていた影響が考えられる。

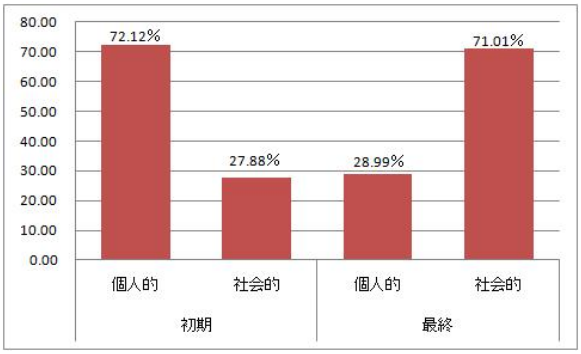

図２　学ぶ意味のレベル（個人的，社会的）の割合の変化

c)　上位層の大半は学ぶ方法も示している

レポート点は 55 点満点であるが、40 点以上獲得した上位層のうち 75%は、習得したい技能だけでなく、それをどのように習得しようとしていくのかのプランまで記述できていた。上位層の 90%が最優秀か優で自己評価していることから、ルーブリックで示された到達基準の影響が考えられる。

＜考察と今後の課題＞

教職必須科目で初期と最終の２回の目標設定を行った結果、学習経験から意味づけて授業後の継続的な学習内容や学習方法が説明されるということがわかった。すなわち、計画性を高めることを狙った学習形態や方法によって、継続的な学習に導く学習経験の構築が可能であると言える。今回の場合でいえば、習得した技能の意味を考察する小レポートの蓄積やレポートの達成基準の明示、協調的な学習による社会的な意味付けがその一翼を担ったといえるであろう。

今回の調査より、上位層の約５割がもともと高い目標をもっており、約３割が自己評価のランクを上げたという結果を得たが、今後はこの３割がどのようなところで目標を高め、学習の見通しを獲得するに至ったかを調査し、主体的に学び続けるための目標設定の条件をさらに明らかにしていきたいと考える。

＜参考文献＞

望月紫帆，西之園晴夫，堀出雅人(2010) 教員研修で学ぶ意味と成果を関連付けた学習目標の明確化の方法．日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集，pp.381-382